慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | K. Ph. モーリッツのイギリス旅行記 |
| Sub Title | K. Ph. Moritz' ,,Reisen eines Deutschen in England im Jahre 1782" |
| Author | 斎藤, 太郎(Saito, Taro) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1995 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.67, (1995. 3) ,p.300(87)- 316(71) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 七字慶紀, 若林眞両教授退任記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00670001-0316 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# K. Ph. モーリッツのイギリス旅行記

斎　藤　太　郎

1782年の夏、ロンドンからダービシャーに通ずる街道を歩く一人のドイツ人があった．駅馬車による交通網が整備されていたイギリスで当時徒歩で旅する姿は珍しく，たまさかそうした者があれば，たちまちいかがわしい存在と見なされ、嘲弄の対象とならざるをえなかった．無骨なドイツ式長靴を履き、みすぼらしい灰色の外套を纏ったこの痩身長軀の男は、傍らを追い越してゆく馬車の乗客からは憫笑と好奇の視線を浴び、道端の子供たちにははやし立てられた．登校途中の生徒たちは口をぽかんとあけて彼の姿を見送り，同情心のある人々は、馬車の屋根席（outside）に乗る金もないこの男をあわれむのだった．まともな旅篭には不承不承迎えられ、高い宿賃と引換えに粗末な食事と、使用人と共用の不潔で暗い部屋をあてがわれたうえ、夜が明けると早々に、不機嫌な給仕や無愛想な女中に背中を押されるようにして再び路上に出なければならなかった．そればかりか、宿を乞う彼の鼻先でぴしゃりと扉が閉められて、夕闇の中、身を横たえることのできる場所を求めてさまようことさえまれではなかった．長靴についた汚れを杖で丁寧にはたき落とし、きちんと宿賃の支払いを約束してみても、また実際に支払ってみても、不当な扱いを軽減する効果は得られなかった．それでも彼は、所持金と体調が許すかぎり、イギリスの自然や自由、発達した産業や制度に感激しつつ元気で朗らかに歩を進めた．日当たりのよい丘の木陰で、そよ風に吹かれて持参したミルトンを読むとき、彼は再び活力と喜びを取り戻すのであった．

この旅行者の名はカール・フィリップ・モーリッツ．ベルリンのグラウ

アー・クロースター・ギムナジウム下級校校長代理の職にあって年齢は26歳であった．このおよそ二ヵ月にわたるイギリス旅行の体験は翌年『あるドイツ人による1782年のイギリス旅行』と題されてベルリンのフリードリヒ・マウラー書店から出版された．[1] すでにいくつかの著作や雑誌論文を通じてベルリンの知識人の間で名をなしつつあったモーリッツは，この『イギリス旅行』によってはじめて全ドイツ語圏の読者の注目を集めることに成功する．この作品はドイツにおける彼の出世作であっただけでなく，彼の名を国外にも知らしめた彼唯一の著作ともなった．旅行記の記述対象となったイギリスでは彼の死後三年目にあたる1793年に最初の翻訳が出版され，[2] 以後1886年にいたるまで版を重ねることになる．とりわけリッチモンドのテムズ河畔の風景描写は，イギリスで出版されたロンドン案内書に収録されて，彼の名をかの地の人々にとって馴染み深いものにした．ヴィリバルト・アレクシスによれば，民衆劇場の舞台に長靴を履き灰色の外套をまとった長身の男が杖を手に登場し，鞄から取り出した書物を路傍の石に腰掛けて読みはじめると，観客は「ドイツ人の教授先生だぞ」と囁き合ったという．[3] この作品のイギリスにおける活発な受容を裏付けるように，『イギリスにおけるドイツ人旅行者1400-1800』の著者ロブソン＝スコットは，モーリッツに「驚くほど率直に自己の人間性を表現する」能力を認め，『イギリス旅行』をドイツ人のイギリス旅行記の中で「最も独創的かつ個性的」と高く評価している．[4]

1756年ハーメルンに生まれ，厳格な敬虔主義者であった父の影響下に幼年期を過ごしたモーリッツは，同じく熱狂的敬虔主義者の帽子職人のもとでの精神的・肉体的苦難に満ちた徒弟奉公を経て，幸運にも勉学の才を見いだされ、ハノーファーのギムナジウム奨学生に採用される．身分制社会の下層出身者にとってはとりあえず上々な人生への足掛かりをつかんだかに見えたのもつかのま，彼は俳優になりたいという「やみがたい熱情」に駆られ，学業なかばにしてハノーファーを出奔してしまう．彼は自分の半生を描いた「心理学小説」『アントン・ライザー』(1785/90) の中でこの「熱情」を彼自身の「人生と運命の結果」と解釈してみせている．「彼（アン

トン・ライザー＝モーリッツ）は子供のころから現実世界より排除され，この現実世界が苦渋に満ちたいとわしいものであったため，現実よりも空想に生きることが多かった．それゆえ，空想世界としての劇場がこうした彼を苛むいとわしい現実からの避難所となった．ここでのみ彼は自由に呼吸することができたのである」[5]

モーリッツは有名な俳優であり劇団座長であったエックホーフに面会を求めてゴータへと徒歩の旅に出るが，参加を拒否され、次いで加わろうした巡回劇団もライプチヒで資金繰りがままならず解散してしまい，彼の俳優として立とうとの希望は完全に頓挫する．彼は目標を牧師へと変更し，エアフルト，ヴィッテンベルクの大学に神学を学んだのち，当時デッサウにあってドイツ教育界の耳目を集めていた，バゼドウ率いる「博愛学校（Philanthropin）」に参加しようとするが，バゼドウとの激しい衝突によってこれも失敗に終わる．彼は1778年７月ポツダムの軍人遺児救護院の教師となり，同年11月にはベルリンの教育界の大立者アントン・フリードリヒ・ビュッシングに見いだされて彼の率いるギムナジウムの付属校に招聘されることになる．

プロイセンの王都ベルリンに教職を得たことで，絶えざる変転と放浪に彩られた彼の生活にはとりあえず終止符が打たれた．宗教，文芸，ドイツ語，ラテン語，書簡執筆作法を担当した彼の働きぶりは，ビュッシングの期待に充分添うものであったらしく，彼は1779年には早くも校長代理に昇進し，ほどなくギムナジウムの非常勤講師を委嘱され，1784年にはギムナジウムの教授に任命されている．1793年に37歳で没するまでベルリンは彼の活動の本拠地でありつづけた．いまだ大学を持たなかったこの都市においてギムナジウムの教師の一員となったことは同時にこの地の指導的知識人サークルに迎えられたことを意味した．教員の給与水準はきわめて低かったため，多くの者はいわば著述業によって生活の資を調達せざるを得なかったからである．モーリッツも，ベルリンへ居を移すと同時に，堰を切ったように旺盛な執筆活動を展開し，『英語の発音一覧』（1779）を皮切りに，ドイツ語学，文章作法，ドイツ語韻律論等の言語関係の著作，自分の教職

経験から生まれた教育論，観察と経験を基盤とした心理学を提唱する論文など，時代の要請であった「民衆の啓蒙」というプログラムに寄与する著作を発表する一方で，数々の「詩神年鑑」に抒情詩を寄稿したり，ドイツ運命悲劇の先駆けとなる戯曲を世に問うなどしている．こうした旺盛な執筆活動を通じて彼はまもなくベルリンの後期啓蒙主義者グループに加わる．ヘンリエッテ・ヘルツ主宰の有名なサロンに出入りをし，モーゼス・メンデルスゾーンをはじめザロモン・マイモン，ヘンリエッテの夫の「哲学的医師」マルクース・ヘルツたちと親交を結んだ．

ベルリンへやって来てからのモーリッツの歩みを概観してみると，当時のこの王都で教育に従事する者が等しく置かれていた経済的困難はあったにしても，知的上流階級の一員として認められ，著作を通じて広く公衆に影響を与えうるポジションを手中にしたことで，俳優あるいは牧師となって他者の称賛を享受したいという，幼少期からの願望は形を変えて実現したように思われる．だが，社会的地位と名声が高まっていったにもかかわらず，彼を一所不住の生へと駆り立てたあの激しい内面の振幅はおさまろうとしなかった．極度に現世否定的で禁欲的な宗教教育に由来するメランコリー症は余りにも深く彼の中に根をおろしており，彼を充足させるかに見える新しい境遇も，それが単調な日常となるにしたがって，彼の存在を束縛する堪えがたい重荷と化してしまうのである．ベルリンでの新しい生活が安定を迎えた1780年にははやくもアメリカに渡って新天地を求めたいという欲求にとりつかれ，同僚の説得にようやくこれを断念している．こうした現状脱出の願望がようやく叶って，生涯初の大がかりな旅行となったのが1782年のイギリス旅行であった．モーリッツの死後『アントン・ライザー』続編という体裁で彼の伝記を著したかつての教え子フリードリヒ・クリシュニヒは，この旅行についてこう記している．「この旅は彼の精神状態にとってきわめて有益だった．グラウアー・クロースターの校長代理の境遇はすでに彼の重荷となっていたので，もしも旅行の許可がおりなかったら，彼はベルリンでの生活に堪えられず，職を辞していたことだろう」[6)]

「世界の歴史を見ても，われわれの時代におけるほど旅行が隆盛を極めたことはない．今や旅行は疫病さながらの流行を見ている．(...) したがって，この書物にあふれた当世にかくも旅行が盛んであれば，おびただしい数の旅行記が生まれたとしても驚くにはあたるまい」[7] 1784年に下されたこの診断は，18世紀後半における旅行記の隆盛を正確に言い当てている．この世紀に出版されたドイツ語の旅行記は，英語，フランス語，オランダ語，デンマーク語，スウェーデン語からの翻訳も含めれば一万点にものぼり，その80パーセントが後半世紀に書かれたものであるという．[8] 世紀前半において大規模な旅行にはなお多くの危険がつきまとっていたため，実利的に明確な目的なくして旅行が行われることはまれであった．だが，世紀半ば頃を境に封建的体制に由来する移動の自由の制限が緩和に向かい，同時に交通網の整備が進むと共に旅行の数は著しく増加し，それと手を携えるように旅行記の数も爆発的な伸びを見せた．1747年発行のツェードラーの百科辞典はすでに旅行記の有用性を強調している．この「旅行」の項の執筆者は，旅行者が旅の成果を個人の仕事上の利益に限定すべきでなく，旅行で得た新しい情報を広く伝達することによって市民社会全体に寄与するよう求め，旅においては他国の政治，社会体制を綿密に観察して「旅行帳 (Reise-Buch)」に記録し，「帰還後よき友人たちに情報を提供」するよう勧めている．さらに，書物による追体験も含めて旅行には人間に関する知識を深め，自己の人格を形成するに不可欠な視野拡大の効用も認められている．[9] 経験と観察によって獲得された知識が判断の基盤をなすというこうした考え方には，啓蒙主義に典型的な認識の方法論が反映している．対象世界の認識は経験の内に基盤を持ち，観察された個別現象の統括によってはじめて秩序的判断が可能となるのである．[10]

モーリッツの『イギリス旅行記』もまた，「観察する理性」という理念の刻印を帯びていた．彼の旅行記は「学校長ゲーディケ氏宛書簡による」との副題が添えられている．彼はベルリンからゲーゲィケと共にハンブルクに向かい，そこから一人でイギリス旅行に出発していた．したがって，この作品は友人にその後の成り行きを書簡で伝えるという形式をとってい

る．その最終書簡の末尾には「ビースター氏に宜しく伝えてください」(150)という言葉が見られる．この二人の名前によって旅行記の第一の対象者が明示されることで，モーリッツがどのような読者層を想定していたかを窺い知ることができる．　フリードリヒ・ゲーディケ（1754-1803）は勤勉篤学だけを頼りに地方の貧しい家庭から身を起こし，プロイセンの王都の言論人として成功を収めたという経歴において，モーリッツ，ザロモン・マイモンらと共に18世紀末のベルリンに典型的な知識人のありようを示している．1776年にフリードリッヒヴェルダー・ギムナジウムの教師に迎えられた彼は三年後には早くも校長に任ぜられ，着任時に衰微の極にあった同校を退任時には模範校に生まれ変わらせた．この目覚ましい活躍はプロイセンの教育担当大臣ツェドリッツの目にとまり，その推挽を受けた彼は30代半ばにしてプロイセンの教育界の中枢をなす一人となった．彼はツェドリッツの秘書であり，王立図書館司書であったヨーハン・エーリッヒ・ビースターと共に1783年１月から『ベルリン月報』の刊行を開始する．この月刊誌はフリードリヒ・ニコライの『アルゲマイネ・ドイッチェ・ビブリオテーク』に次いで，レッシングが去ったベルリンにおける後期啓蒙主義の最も重要な発表機関として，啓蒙主義が対象とする様々な主題の議論の場を提供した．第一巻の序言は刊行目的を，「真理の追求」「有益な啓蒙の普及と有害な誤謬の追放」に設定しており，その手段としては最新の学問成果や卓越した人物の紹介，観察に基づく人間学とならんで，「諸民族，なかんずく近隣諸国の習慣や制度」の記述をプログラムに掲げ，実際に同誌は数々の旅行記を掲載している．

『ベルリン月報』にはモーリッツも『アントン・ライザー』断片をはじめ様々な作品を寄稿しているが，その初年度第一巻に，『ロンドンからの書簡．ロンドン，1782年６月13日』と題されて『イギリス旅行』の一部が掲載された．[11]「親愛なるゲーディケ，約束を果たすため，わたしがこれまで当地に滞在したなかで目にし，気づいたことの中から特に興味深いものだけをえらんで伝えよう．残りは直接話す機会までとっておくことにする」という書き出しの『ロンドンからの書簡』は，イギリス議会における議論

の様子およびロンドンの教育事情を伝えている．当時の啓蒙主義者にとってイギリスは，その民主的な政治制度や農工業の先進性において範と仰ぐべき存在であった．モーリッツが「特に興味深いこと」に選んだ二つの対象は，この書簡が，他国の状況を伝達することによって自国の社会の発展に寄与するという，旅行記の啓蒙主義的意義に添って書かれたことを示している．事実ゲーディケもこの書簡に脚注を付し，すでに一年前のものではあるが「興味深く，あまり知られていない」情報ゆえに「楽しく読めるであろう」と，「娯しみと教訓（prodesse et delectare)」のモットーに即した評価を与えている．

『イギリス旅行記』はイギリス本土上陸の描写を含む5月31日付の書簡で始まっているが，『ロンドンからの書簡』には最初にハンブルクからロンドンまでの旅程が手短に述べられていることから判断して，これが実際にゲーディケに出された初めての書簡であると思われる．したがって，『イギリス旅行記』は全編ゲーディケ宛書簡という体裁をとってはいるものの，実際にはモーリッツが旅行中に書き留めた記録をベルリン帰還後に再構成したものと考えられる．全体は14の書簡から成り，その内7書簡がロンドン発，5通が旅先（リッチモンド，ウィンザー，オクスフォード，キャッスルトン，ノースハンプトン）からの書簡，そして最後の2つが再びロンドン発という構成である．ロンドン発の長大な書簡数通はさらに主題ごとに小見出しが与えられて形式的には論文に近いものとなっている．

モーリッツがこの作品を「一ドイツ人啓蒙主義者のイギリス旅行記」と理解していたことは，上に見た状況からも明らかだが，それはこの旅行記の一面しか表していない．規範的な啓蒙主義的旅行記（例えばフリードリヒ・ニコライのそれのような）が，客観的・網羅的な対象記述に基づいて体系的情報を伝達することを主眼に置いているのに対し，モーリッツは外界の対象と同時にそれを知覚する自己に焦点を合わせている．網羅的・包括的な対象記述と体系的情報伝達からの逸脱は，例えば「著者はかの王国における短い滞在期間に見聞したものを，時として過度に詩的に傾きつつ描いているが，たまたま目にする機会に恵まれなかったものに関してはな

んら考察していない」[12]という同時代の書評のなかに批判的に，しかし正確に捉えられているが，こうした主観的傾向については，モーリッツ自身自覚的であった．短い序文の中で彼は自分の記述した対象が「多くの人の目にはわたしとは違ったふうに映らざるをえない」（3）だろうことを認めている．しかし主観的パースペクティヴの選択は偶然的なものではなく，明確な形式意思の反映であった．彼はある旅行記の書評の中で，この選択の正当性をこう根拠づけている．「この世のあらゆる物の中でわれわれの最大の関心事は人間であるから，人間以外のあらゆる物も，興味深いものであるためには，ある人間の頭の中で一個の全体へと秩序づけられねばならない．（...）自分自身がその国へ旅することができない場合には，他の人が代わりに楽しんでくれれば，その人の心のなかで楽しむことができる．（...）それゆえ，物事をありのままに描いたものよりも，他の人間の頭を通した描写の方が好ましいのである」[13] 事実彼がロンドンから書き送る社会的，政治的情報はすべて彼自らが体験した具体的な事例である．彼はイギリスの憲法を説明する代わりに，議会における白熱した討議の模様を，イギリスの選挙制度を論ずる代わりに，自分が目撃した補欠選挙の情景を描写している．

「われわれの最大の関心事は人間である」という，ポープのモットー（"The proper study of Mankind is Man."）を彷彿とさせる命題は，時代の最新学問「人間学」（Anthropologie）の基本理念だが，これは同時にモーリッツ個人にとって，自己の幼少年期を規定した禁欲的・現世否定的世界観に対するアンチテーゼであり，自己救済の契機となる重要な理念であった．彼は『アントン・ライザー』の中で，自分が「子供の頃より，現実の世界から空想の世界へと追いやられ」たため，「ほとんど自分の存在（eigene Existenz）を持たなかった」さまを執拗に描き，[14] その要因となった「社会的，経済的，世界観的な抑圧のメカニズム」[15]を暴き出している．被抑圧状況に置かれた人間の自己回復の可能性を問うことが彼個人にとって切実な課題であってみれば，イギリスにおいて彼の視線の向かう先は必然的に自分と類似の状況にある人間となった．ロンドン滞在中，彼を驚嘆

し感激させるのは，社会の周縁に所属する人々さえもが確固とした「自分の存在」を持っている事実である．モーリッツは，幼児期の印象が後の人格に消しがたい痕跡を残すという事実を身をもって経験していた．彼の最初期の記憶は，両親の言い争う声と愛情の不在であり，「こうした最初の印象は人生において二度と彼の魂から消え去ることなく，そのため彼の魂はいかなる哲学をもってしても排除できない陰鬱な想念の集積場となることが少なくなかった」[16]「ごく幼い頃さえ一度として両親の優しい愛撫を味わったことがなく，ささやかな努力に応える両親の微笑みも知らなかった」[17] 彼がロンドン市民の家庭に見いだすのは，自分の幼児体験の対極にある親子関係である．「ここでは低い身分の両親も子供たちに優しい心遣いで接していて，われわれの民衆のように殴打や罵倒によって子供たちの精神を抑圧することは少ないようだ．わが国の下層身分の両親は子供たちを自分と同じような奴隷へと育てあげるのに対し，当地の子供たちは早い時期から自分を尊ぶことを学ぶのである」(49)「自分の存在」の核となる自尊心の涵養において身分の違いは存在しない．イギリスの子供に対する自由で自然な教育の表れを彼はその外見に見る．「当地の青少年の間では青ざめた顔色，ぶかっこうな顔つき，アンバランスな体型は珍しい．われわれの所ではその逆の方が珍しい．さもなくば美しい人間があれほど目立つはずがない」(49)彼はベルリンとロンドンの街路を比較して，建築物はベルリンの方が美しいが，人間の美しさにおいてはロンドンに優位を認めている．「雑踏の中では最上流から最下層まで種々の人間に出会うけれども，そのほとんどは姿形が美しくこざっぱりとした身なりの人々ばかりで，荷車引きにしても白いシャツを着ているし，ぼろぼろの身なりをした乞食でさえ清潔な肌着だけは身につけている．こうした光景を見るのは実に良いものだ」(16)階級差を超えた外面の姿形の美しさは，階級差を超えた内面の美しさに対応しており，その証拠を彼は民衆の教養水準の高さに見る．「イギリスにおいて古典作家たちは，ドイツとは比較にならぬほど多く読まれている．ドイツの作家たちは学者を除いてはたかだか中流階級の人々が読むぐらいで，それすら稀なことだ．イギリスの国民作家は民衆によっ

ても読まれていて，なによりも無数に版を重ねていることがそれを物語っている」(20) モーリッツにとってイギリスは，なによりも彼が少年期にむさぼり読んだシェイクスピア，ミルトン，ヤング，トムソン，スターンの国であった．モーリッツの寄宿先の女主人は「仕立屋のやもめにすぎないが，ミルトンを読んでいる」．そればかりか「卑しい身分の者たち」ですら，自国の作家を知悉している．「それによって下層の民の品性は高められ，上流の人士に近づくのだ．上流階級においてごく普通の会話の主題ならば，下流の者が話題についてゆけないようなものはほとんどない．ドイツではゲラート以来，民衆の口にのぼる詩人の名はまだ存在しないのだが」(25)

モーリッツにとってイギリス社会の階級差は経済力の差のみに還元されるのであり，経済力という座標軸を除外して見れば，内面・外面いずれにおいても人々の間には格差は存在しない．教育と人格形成における自由と平等は，政治制度によっても保証をうけている．身分格差を超えて平等な「自分の存在」を確信すると同時にイギリス社会賛美の頂点をなすのが，コベントガーデンにおける立会い演説会の情景である．演壇の前には「民衆が群れ集い，その大半は下層民」(37) であるが，議員候補は彼らに対して「Gentleman (高貴なる市民諸氏)」(37) と呼びかける．ここでモーリッツの注目を惹くのはまたしても子供たちの姿である．「幼い少年たちは欄干や街灯にしがみついて，自分たちも演説の対象なのだと確信しているかのように演説に聞き入っている．そして演説が終わると，大人たちと同じように帽子を振り，歓呼の声で賛辞を送るのだ」(38)　みずからの半生を振り返って，自分が現実への主体的参加が阻まれて空想世界に逃避の道を見いださざるをえなくなったのは「社会的境遇によって抑圧された人間性の感情」[18] ゆえであると分析するモーリッツは，ここに社会的所属階層の違いにもかかわらず抑圧から自由な人間性の発露を見てこう叫ぶ．「友よ，ここでは一介の荷車引きでさえ時事に関心を示し，幼い子供らもすでに国民精神の一員となっている．つまり，誰もが自分だって王や大臣と同じ一人の人間，一人のイギリス人なのだという感情をあらわにしているのだ．

こうした光景を前にした気持ちは，ベルリンで軍事教練を見るときとはずいぶん違ったものだ」(38)　生まれながらに「支払う役ではなくて働く役」[19]をあてがわれることが，そのまま公共圏からの排除を意味する祖国ドイツの状況に対し，モーリッツの目に映るイギリス社会においては「働く役の者」と「支払う役の者」という経済的「役割」を超えて，「高貴なる市民」という「役割」を演じる可能性があらゆる階層に開かれている．つまり経済的能力という座標軸で見れば最下層に位置する人々も，イギリス市民という出自を越えて平等なものとして制度化された存在形態に自己を仮託するかぎりにおいて，一個の自律的人間であるという意識が獲得されるのである．

モーリッツはイギリス旅行と同年に，同じくゲーディケに捧げた『実験心理学への展望』を発表し，教育実践上の必要から観察と実験に基づいた心理学を提言している．[20] 彼の構想する心理学の対象は抽象的概念としての人間ではなく，あくまで個々の人間の現実であり，その最終的な目的は，「個人としていかにとるに足らぬ者であっても，自分は重要なのだということを分からせ」ることである．[21] なぜなら，個々の人間が健全な自尊心に目覚めることによって，「民衆の中にまったく新しい精神が現れる」[22]ことが期待されるからである．モーリッツの描写するコヴェントガーデンの選挙戦の模様は，彼がイギリスの民衆の内にこうした「民衆啓蒙主義的」理想の実現を見ようとしていることを窺わせるが，この『展望』で興味深いのは，人間心理研究の資料としての自己観察に関する記述である．彼がヴォルフ派心理学における演繹的・思弁的な推論に対抗する方法として選択するのは，観察事実の集積による帰納的推論であり，その最も有効な手段として挙げられるのが自己の観察である．人間の観察者たろうとする者は，「他人の魂の中を覗き込むことができない」[23]以上，まず第一の観察対象となるのは自己の内面である．「現在の自分自身の生に注意を向け，一日の内におのれの魂の中に生ずる潮の満ち引きを注視し，一瞬毎の変化を見て取らねばならない．自分の思考の流れを書き記す時間をとり，自分自身を絶えず観察の対象にしなければならない」[24]　自分自身の思考の動き

を知悉し，その知識に基づいてはじめて「表情，言葉，行動を通じて他者の魂を推し量る」[25]ことができるからである．そして，自己の内面から精密な観察データを蒐集するためには，観察者としての自己と被験者としての自己との間に客観性を保証する距離を設定する必要がある．したがって，「激しい感情の動きをまったく失ってはならないが，同時に生活のなかで時には激情の渦から身を引き，自分に対する一切の関心を捨ててしばし冷静な観察者の役を演じる術も心得ていなければならない」[26] 観察者を演じる自己が措定されると同時に観察される自己も「世界という劇場」における演技者に変容する．そして「劇場としての世界」というメタファーの導入によって自己観察は学問上の方法論を超え，自己救済の意味をはらむことになる．「だが，一体だれが人間観察者に，出来事すべてを演劇のように観察し，彼の心を傷つける人々を俳優と見なすのに必要な魂の冷徹と快活を与えてくれるのだろう（...）自分に演ずるべき役が与えられないと見るや，私は舞台の前に立って，冷静な観察者となる．自分の状況が辛いものとなったら，自分自身に対する関心を抑え，自分を自己観察の対象と見なすのである．あたかも自分が他者であって，その幸運や不運な物語に冷然と耳を傾けているかのように．（...）自己観察は慰めであり，自分の心的苦痛から避難所である」[27]

ベルリンの「学校という牢獄」からの脱出先であるイギリスは，モーリッツにとって最初から劇場のイメージにおいて捉えられている．「親愛なるG．よ，わたしは長年この目で見たいと熱望し，幾度となく夢想してきたあの国の幸福な海岸をついに両側に見ているのだ．数刻前にはイギリスの緑の丘陵は遠い青に霞んでいたが，いまや左右に二面の野外劇場のように広がっている」(5) 現実世界において「演ずるべき役」を与えられず，空想の世界に逃避する道しか与えられていなかったモーリッツは，ここでイギリスというもうひとつの現実全体を劇場に変容させ，異邦から来た「観察者」の役柄で演劇に参加するのである．ロンドンにおける彼は大都市における人間の匿名性に守られつつ，その観察眼をもっぱら他者に向けていた．だが，彼がロンドンを離れて田園地帯に入ってゆくと共に，徒歩で旅

する彼に今度は他者が視線を投げかけることになり，それと同時に彼自身の視線も自分に向かう．「徒歩で旅する者はここでは珍しい生き物ででもあるようで，出会う人だれもがじろじろ見つめ，あわれみ，怪しみ，逃げるのである」(68)

外界の事物はそれを知覚する主体の統括作用によってはじめて有機的な形姿を獲得すると考えるモーリッツにとって，馬車は「車輪のついた牢獄」であり，感覚的経験と直観を蒐集するための空間移動の手段としては，自分の身体を媒体に風景を体感しうる徒歩以外には考えられない．だが，徒歩で旅する者は，車室 (on the inside) も格安の「屋根席 (on the outside)」も利用できない，いわば「アウトサイダー」のさらに「アウトサイダー」であって，貧しい下層民さえ憐憫と軽蔑の視線を浴びせるような存在なのである．「貧乏のためではなく，風俗や人間を知るために徒歩で旅をしている」(90) 異邦人という役柄は，彼の「共演者」たる田舎町の人間には理解してもらえない．その結果，旅に疲れた体を休めるべく訪れた旅篭において彼はほぼ毎回，冷淡な拒絶あるいは屈辱的な応対を耐え忍ばなければならない．自分の危機に陥った「自尊心」を救出するために選ぶ場所は自然美の世界である．「わたしの前に広大で美しい，胸躍るような展望が急にひらけたため，その瞬間に人間たちによる侮辱や不正に関する思いは忘れてしまった．なぜなら，ここには豊饒な自然が，この世で最も美しい風景の一つであり，ポープの詩神が選んだ最上の素材が，わたしの足下，わたしの眼前で壮麗に展開していたからである．この瞬間，これ以上何を望めたというのだろうか」(72) 極めて散文的で不快な体験と陶酔的自然体験が交互に現れるという展開は、この旅行記全体を通じて繰り返され、彼を絶えず悩ませた問題をこのうえなく印象的に描き出している．

この旅行記を読むものは、モーリッツが徒歩旅行の途上で甘受しなければならなかった数々の屈辱的扱いと、それにも関わらず変わることのない彼の田園風景に対する感激の身振りとの著しい対照に驚かされるとともに，なぜ彼が倦くことなく不愉快な体験を報告し続けるのか不思議に思わざるをえない．徒歩で旅する者が乞食や追い剝ぎと見做されることは旅の

初期の段階で明らかになっている上に，彼を侮辱し，自分の生活圏から排除しようとするのは，モーリッツの所属階層よりも下層の人間である使用人や女中なのである．しかし，そうした体験を報告する彼の叙述には、アントン・ライザーが同種の状況で味わった絶望的な敗北感や無力感とは微妙に異なる、一種の落ち着き、余裕が感じられるのである．「疲れ果て，病人さながらの状態で」たどりついた旅篭の食堂でうたたねする内に，彼は彼の素性をめぐる使用人たちの議論を耳にする．「ある女はわたしに味方して言った．"I dare say, he is a well bred Gentleman（あたしは卑しい身分の人じゃないと思うわ）" もうひとりの女は，わたしが徒歩で来たことを理由にこれに反対して言った．"he is a poor travelling creature!（あれは一文無しの浮浪者よ）(...)いまでもこの時のことを思い返すと，この "poor travelling creature" が耳に突き刺さる気がする．なぜなら，どこにも故郷をもたぬ人間の惨めさと，そうした人間に浴びせられる軽蔑とがこの短い言葉のなかに表現し尽くされているように思えるからだ」(133)おそらくは金銭的な意味で発せられた "poor" という語を，語り手モーリッツは世界内のどこにも帰属する場所をもたず，個人としての価値を全く認められない人間の境遇を凝縮した表現と理解する．「自分の存在」を脅かすこうした危機を脱するために，彼は自分を形容する "poor" という語から彼の自意識を揺るがす危険な含意を排除しようとする．彼は疎外者の問題を専ら金銭的な意味に局限することで切り抜ける．「翌朝わたしは一シリングの請求を受けた．これに対しわたしは半クローネを渡し，poor travelling creature をこの身からふりはらうため，おつりを受け取らなかった．その結果わたしは至極丁重なおわびの言葉と共に見送られ，ふたたび朗らかに歩を進めたのであった」(133)

観察する自己と観察される自己という二重化を発動することによって，自由意思によって徒歩旅行を選択した異邦人という役柄を演じ，その演技者とイギリスの民衆との即興劇を楽しむ視点が回復される．敵意と蔑視の体験すら熟慮の上で自ら遂行した実験の結果であると考えることで，彼は自分自身の困難な状況を他者が主人公の冒険物語に読み変えるのである．

「こうした驚くべき不人情ぶりをイギリスの旅篭で経験しようとは予想もしていなかった．だがわたしは，この人々の冷酷さがどこまでひどいものか，あらゆる手だてで確かめてやろうと思った．そこで，ベンチに寝かせてもらえるだけでもよいから，宿を与えてくれ，もう疲れ切っていてこれ以上歩けないから，と頼んでみた．だが，この願いを伝えおわらぬうちに，わたしの鼻先でドアが閉められてしまった」(89)

数々の不快な体験が執拗に描写されるにもかかわらず，『イギリス旅行』は全体としてモーリッツの作品としては異例なほどに楽観的で明るいトーンに貫かれている．それは，彼がイギリスという「舞台」において，「人間観察者」という役柄を最後まで演じ通せたことと無関係ではない．『アントン・ライザー』に描かれた彼の少年期の旅が，つねに「ここではないどこか」を求めた無目的な脱出行であったのに対し，イギリス旅行における彼はゲーディケを始めとする読者に他国の社会状況と人間性に関する知識を伝達する役割について当初から自覚的であることができた．だが，かつて現実において演ずるべき役割が与えられなかった彼にとっての逃避先である劇場が結局のところ「空想世界」であったことを思えば，彼が非日常空間であるイギリスで「役を演じる」ことができたとしても，その「現実」にはあやうさがつきまとっている．旅行を終えてベルリンという「日常の現実」に戻るとともに，「冷静な自己観察者」の演技を可能にした舞台背景は魔法が解けたように消えてしまう．イギリスで罹った肺炎をきっかけに重度の抑鬱状態に陥り，死の幻影に責め苛まれることになるのは1782年12月のことである．

註

1） Moritz, Karl Philipp: Reisen eines Deutschen in England im Jahr 1782. In Briefen an Herrn Direktor Gedike, Hrsg. von Otto zur Linde. Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts, 126（Berlin 1903; Nachdruck Nendeln/Liechtenstein 1968）．以下同書よりの引用は頁数のみ本文中に挙げる．

2） Travels, chiefly on foot, through several parts of England in 1782.

Described in letters to a friend. By Charles P. Moritz, a literary gentleman of Berlin, translated from the German, by a Lady. London 1795.

3) Alexis, Willibald: Anton Reiser. In: Literarhistorisches Taschenbuch. Hrsg. von R. E. Prutz. Hannover 1847, 5頁.

4) Robson-Scott, W. D. : German Travellers in England 1400-1800. Oxford 1953, 175頁

5) Moritz, Karl Philipp: Anton Reiser. Ein psychologischer Roman. Hrsg. von Wolfgang Martens. Stuttgart 1972, 450頁.

6) Klischnig, Karl Friedrich: Erinnerungen aus den zehn letzten Lebensjahren meines Freundes Anton Reiser. Als ein Beitrag zur Lebensgeschichte des Herrn Hofrath Moritz. Berlin 1794, 64頁.

7) (Anonym) : Ueber das Reisen, und jemand der nach Anticyra reisen sollte. In: Teutscher Merkur. Nov. 1784, 151頁以下.

8) Jäger, Hans-Wolf: Reisefacetten der Aufklärungszeit. In: Der Reisebericht. Die Entwicklung einer Gattung in der deutschen Literatur. Hrsg. von Peter J. Brenner. Frankfurt a. M. 1989, 264頁.

9) (Zedler, Heinrich): Großes vollständiges Universal-Lexicon aller Wissenschaften und Künste. Bd. 31. Halle 1742, 375段.

10) Cassirer, Ernst: Die Philosophie der Aufklärung. Grundriß der philosophischen Wissenschaft. Tübingen 1932, 77頁.

11) Moritz, Karl Philipp: Ein Brief aus London. London den 13. Junius 1782. In: Berlinische Monatsschrift,1 (1783), 298-305頁. ここでの引用箇所は298頁.

12) 『イギリス旅行記』第二版 (1785) の書評. In: Allgemeine Deutsche Bibliothek. Bd. 71, St. 1 (1787), 169頁.

13) Vossische Zeitung, 25. Dez. 1784, S. 1185.

14) Moritz: Anton Reiser. 239, 413頁.

15) Schrimpf, Hans Joachim: Karl Philipp Moritz. Stuttgart 1980, 16頁.

16) Moritz: Anton Reiser. 13頁.

17) 同上

18) Moritz: Anton Reiser. 366頁.

19) 同上

20) Moritz, Karl Philipp: Aussichten zu einer Experimentalseelenkunde. An Herrn Direktor Gedike. Bei der Jubelfeier des Werderschen Gymnasiums. Berlin 1782. この心理学の構想は，モーゼス・メンデルスゾーンの助言により，実験と観察を包括する「経験心理学」と名称を変えて『経験心理学のための雑誌 Magazin zur Erfahungsseelenkunde』

(Berlin 1785-90) の刊行の形で結実することになる.

21) Moritz: Aussichten. 24頁

22) 同上

23) Moritz: Aussichten. 17頁.

24) Moritz: Aussichten. 16頁.

25) Moritz: Aussichten. 18頁.

26) Moritz: Aussichten. 16頁.

27) Moritz: Aussichten. 20頁.